

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第17回

ワクチン接種が進む英国



イラスト・題字：長峯亜里

成人全員の接種を7月末までに

まだ肌寒い4月初旬、筆者の近所の女性たち数人が中庭に集まった。飲み物とピクニック用椅子を持ち寄り、互いに2メートル間隔を開けて座りながらの談笑に花が咲いた。英国・イングランド地方では昨年からの新型コロナウイルスの感染阻止のために都市封鎖(ロックダウン)が断続的に続き、ここ数カ月は同居していない人と集うことが禁止されていた。これが少しずつ解除されたのが、今年3月末。筆者を含めた4人が直接顔を合わせて話すのは久しぶりである。

女性2人はここ10日ほど、全く姿を見せなかった。彼女たちの子どもたちが通う学校で行われたPCR検査で2人とも陽性となり、自宅で隔離していたからだ。3人目の女性と筆者はすでにコロナ・ワクチンの1回目を接種済み。「早く全員がワクチンを受けられるといいね」と1人が言うと、ほかの女性たちが^{あいづち}相槌を打つ。英政府は現在、50歳以上を対象にワクチン接種策を進めているが、成人全員の接種を7月末までに終了することを目指している。4月上旬時点で3千万人以上が1回目の接種を終わらせており、これは成人の58%に相当するという。

なぜ急ピッチに進んだのか

英国の100人当たりのワクチン接種者数は世界でもトップクラスだ(イスラエル111人、英国54.3人、米国46.6人：4月1日付 Our World in Data 調べ)。昨年12月8日に最初の接種が行われ、現在まで急ピッチで進んできた。

英政府のこれまでのコロナ対応を見ると、都市封鎖の開始が遅れ(1回目が昨年3月末)、当初は検査キットや医療関係者の感染防御セット(眼鏡、ケープ、マスクなど)が大幅に不足した。欧州の中ではコロナによる死者数がダントツ(4月上旬時点で約12万人)で、決して「コロナ対策に成功した国」ではない。



英 NHS による新型コロナ・ワクチンの説明パンフレットと接種カード(右)。カードの裏には接種した人の名前、日付などが書かれている(撮影筆者)